

清末小説から 96

2010.1.1

施蟄存による林紓冤罪事件.....樽本照雄 1

《外交小説 世界秘史》の原作.....渡辺浩司 6

對蔡元培 答林君琴南函 的一点質疑.....李 慶國12

近代小説《慨生游志》系《老残游记》の仿作.....張 永芳18

晚清小説作者掃描(貳拾壹).....武 禧21

『繡像小説』問題.....樽本照雄17 / 清末小説から24

本年もよろしくおねがいいたします。本誌があと4号で第100号になろうとは予想もしませんでした。まだ続きます。清末小説研究資料叢書12の刊行を準備中です。詳しくはそのうち

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8番4-202 樽本照雄方

施蟄存による林紓冤罪事件

樽本照雄

外国人の名前をどう表記するか。翻訳するとき、必ずといっていいほどでてくる問題のひとつだ。

他言語の音を日本の文字で表記する。ものにもよるが、基本的にいえば、正確な翻訳は困難だ。音の体系が異なる。どうしても近似のものにならざるをえない。

また、翻訳者の知識、表記方法、あるいは時代の状況によっても変化する。日本では、原語の音を尊重しカタカナを使って音写する(漢字は問題が別になる)。しかし、はじめから一致して動かないというわけではない。ギョエテとは俺のことかとゲーテ云ひ(齋藤緑雨とか)、と俗に伝えられている。

ひとりの外国人に複数の翻訳名が当てられるのは避けられない。時間が経過していくうちにだんだんと定着する。あるいは、実際の発音からは離れている翻訳名が、広く使用されて習慣になるということもありうる。ルブランの作品に出てくる怪盗紳士ルパンは、リュパンと表記されると別人のような気がしてしまう。現在でもヘボン式ローマ字表記を使っている。このヘボンがヘップバーンになると落ち着きが悪い。だが、アメリカの映

画女優の名前ならどうしても後者だろう。長年にわたって受け入れられた表記は、たとえ正確ではないにしても無視することもできない。

文字が異なるとき、当然、翻訳のしかたは違ってくる。では、a b c が同じであれば問題は生じないかといえば、そうでもない。フランス語と英語では綴りが同じでも、実際の発音は違う。

ヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo) について日本では、以前はユーゴーと表記することが多かった。ユゴオという表記もある*1。現在はユゴーと普通に書く。

フランス語原音によりながら表記が少し変化しただけ。ゲテほど多様ではないにしても、最初からひとつではない。英語読みであれば、ヴィクター・ヒューゴー (またはヒューゴ) に近い。英語の文脈からいえば、そう読まれるだろう。

漢訳にも同じような状況がある。

ひとりの外国人にいくつかの漢訳が併存しているというのであれば、どこにでも見られる普通の現象にすぎない。しかし、中国のばあいが特異なのは、ユゴーの漢訳表記をめぐる林紘に濡れ衣がきせられている事実があるからだ。作家、評論家、翻訳家、大学教授で著名な施蛰存 (1905-2003) が、権威をもつ文学全集に根拠のないことを書いている。その文章は、該書編集者の目を通過して公表された。長い時間が経過したにもかかわらず、研究者はそれに対してほとんど誰も訂正する文章を書こうとはしない。そういう事柄である。

施蛰存の説明

私が見るのは、施蛰存「導言」(『中国近代文学大系』第11集第26巻 通訳文学集 1 (施蛰存主編) 上海書店1990.10) の一部分だ。

施蛰存は、まず林紘を擁護する。林紘は自らの翻訳につけた序文において外国文学の芸術性を分析し、その一部分は要点をついている、と。ディケンズ、スウィフトらの思想意義について高く賞賛した、と。彼はつづけて、林紘が文学革命に反対したことをとりあげる。

林紘はかつて白話文に反対したために新文学運動のなかの頑固な保守派だと認識された。それ以後、歴史家はどうしてもかたよってしまい、彼を革命派、進歩派に対立する人物の列に入れてしまった。林紘が書いた多くの翻訳小説の序文、題辞の中から、私たちは彼の思想境地が決して頑固ではなく、決して保守ではない一面を見いだすことが可能である。

19頁

ここまでは、よろしい。林紘に対するかたよった評価が発生した原因と経過を施蛰存は冷静に説明している。

問題が出てくる直前部分から紹介しよう。人名の翻訳について施蛰存は次のようにのべている。

いくつかの現象があって、本世紀最初の30年における文学訳本のなか

にそれらの欠点を暴露している。まず、翻訳名の音訳が不正確、不統一である。多くの翻訳小説は、日本語訳本から転訳されたものだ。原作者の名前も日本語音訳から転訳された。たとえばゴークキー〔高爾基〕だが、呉禱は戈礪機^マとし、魯迅は戈理基とする。周瘦鷗は英訳本から翻訳して高甘〔Gorky〕と訳したが、これは英語の読み音が正しくないことによる。19頁

ここにある本世紀とは、いうまでもなく20世紀を指す。施蛰存は、1930年までの翻訳状況について説明している。

中国近代翻訳文学の特色を説明するために彼は、ゴークキー()を例に持ちだした。漢訳の実際を見ると、いくつもの表記があって不統一だというのだ。あげられた例を見れば、確かに不統一である。ただし、戈礪機も戈理基*2も中国音で発音すれば似たり寄ったり。大きく相違しているわけではない。近似の音を当てるとすれば漢字が異なる。やむをえないだろう。

周瘦鷗が英訳本にもとづいて高甘と翻訳したのは、英語が誤っているからだとして施蛰存は断言する。

上の引用文に〔Gorky〕と補っておいた。それが周瘦鷗の翻訳に示された表記である。ならば、英語では Gorky をゴークキーと発音しても不思議ではない。それを周瘦鷗が蘇州方言で翻訳して高甘になったらしい。底本が英訳本であったか

ら、人名も英語風に読んだ。人名部分だけ原語音で発音するというのもひとつの考え方だ。しかし、施蛰存のように正しくない、と断言できるものなのか。現代の基準を過去にさかのぼらせてはいないだろうか。私はいささか懐疑的だ。

施蛰存は、小さな誤記をしている。呉禱が「戈礪機」と翻訳したというのだが、正しくは「戈厲機」だ。誰にでもある小さな間違いといえる。しかし、呉禱の翻訳作品は、施蛰存自身が編集した翻訳文学集1そのものに収録されている。しかも、「編者」つまり施蛰存は、その「解題」において「戈厲機は、戈理基とも訳した。今は決まって高爾基と訳す〔戈厲機、亦訳戈理基、今定訳高爾基(1868-1936)〕」(633頁)と説明する。違いは1字にすぎない。しかし、同じ著者が「導言」と「解題」では表記を変えているからなにかの勘違いだと思う。

施蛰存による林紓冤罪事件

以上は、ゴークキーの漢訳について不統一であった、と理解しておく。問題は、つづく箇所にある。もとの漢語をカッコに入れて示したところがある。わずらわしく見えるだろうが、微妙な違いを理解するためには必要なのだ。

林紓はフランス作家ユゴー〔雨果〕を鬻俄〔ヒューゴー〕と翻訳した。合作した人が英訳本から口述したことがわかる。英語の読みによれば、ユゴー〔雨果〕はヒューゴー〔許果〕

となる。林紘は彼の福州方言を用いて囂俄と翻訳したのであった。この不正確な訳名は、多くの訳者によってずっと使われ続け、1929年に出版された方子訳『可憐的人』にいたるまで、やはり「囂俄[ヒューゴー]著」と題したのである。奇妙なのは、林紘はユゴーの『九十三年』を翻訳して書名は『双雄義死録』であるが、作者名はといえば「ユゴー[預勾]」だった。このことから、その本の口述者が用いたのはフランス語の本だとわかるのである。しかし、林紘自身はおそらくユゴー[預勾]がヒューゴー[囂俄]であることを知らなかったであろう。19-20頁

施蟄存がいうように、中国では、ユゴーを雨果と書くのが現在は一般的だ。施は、ゴーリキーについて英語の読み音(ゴーキ-)が正しくないと書いていた。同じく Victor Hugo についても英語読みのヴィクター・ヒューゴー(またはヒューゴ)は不正確だという。この英語読みから囂俄がでてきた。最初にそう訳したのは林紘だ。こう施蟄存は断言している。しかも、その誤用が長く続いたともいう。

確認しておきたい。囂俄は英語にもとづいた漢訳だ(英語系ヒューゴーである)。一方、雨果はフランス語にもとづいた漢訳となる(フランス語系ユゴーとする)。中国における大まかな流れをいえば、最初つまり1900年代は英語系囂俄だったものが、40年代からフランス語系雨果に転

換した。

施蟄存の文章には、問題がいくつかある。

問題1: ユゴーを英語読みで囂俄[ヒューゴー]と翻訳したのは林紘である。そのとき、林紘は福州方言を用いて囂俄と表記した。

問題2: 林紘はユゴー『九十三年』を翻訳して原作者を預勾とした。そこから口述者はフランス語本を底本にしたとわかる。

問題3: 林紘は、自分が翻訳していてユゴー[預勾]とヒューゴー[囂俄]が同一人物であることを知らなかった。

以上のうち問題1と3は関係する。先に問題2から検討しよう。

林紘+毛文鍾はユゴー『九十三年』を漢訳して『双雄義死録』(1921)と題した。そこまではいい。共訳者である毛文鍾は、英語ができた。私は、英訳版本多数を比較検討したことがある。彼らが漢訳の際に使用した底本は、英訳要約版だというのが私の到達した結論だ。そればかりか完訳版も参照しながらそこから補っている。林訳は頁数こそ多くはないが、手間のかかった翻訳である*3。

林紘らは英訳要約版を底本にした。原作者名をフランス語系ユゴーの「預勾」に漢訳していることと、底本が英語版であったことは関係がない。原作者の漢訳名は、底本が何語で書かれていたかを特定する根拠にはならないのだ。つまり、問題2は成立しない。

決定的な誤りは、まさに問題 1 にかかわる。囂俄を使用しはじめたのは林紘だ、と施鰲存は断定した。

だが、林紘が翻訳したユゴーの作品は、ひとつだけ。上の預勾著『双雄義死録』がそれだ。林紘が囂俄を使用した事実はない。中国では、韓一宇がそのことを指摘している*4。ほぼ唯一の例だといってい

いだろう。結果として、問題 3 の預勾と囂俄が同一人物であることを林紘が知らなかった、という施鰲存の説明はこれも成立しない。

囂俄という表記は、林紘とはもともと無関係である。林紘が福建出身だから、福州方言を使って囂俄という漢字を当てた。施鰲存が提出したこの推測は、はずれている。

施鰲存は、あたかも林紘がユゴー作品を複数翻訳しながら、著者名に異なる漢訳を当てたかのように説明した。同一人物に別の漢訳をほどこしたのは、林紘と共訳者には外国文学の知識がなかった、という意味になる。あるいは、林紘はそれほどずさんな翻訳を行なった。施は、そのように記述したのかわからない。該書の編集者もそれを読んで疑問に思わなかった。五四時期の林紘について、その評価はやや同情的であった。しかし、林紘に対する侮蔑の感情が露わになった文章だと私は感じる。

よく見てほしい。囂俄に関して、林紘にしてみればそう翻訳した事実そのものが存在しない。囂俄という漢訳名は、林紘が作り出したものではないのだ。林紘がやっていないにもかかわらず、施鰲存

は林紘の責任を追及している。だからこれを、施鰲存による林紘冤罪事件だと私はいう。研究者のほぼ全員がそれに賛同した。事実を無視して林紘を貶めたのである。最初から林紘が批判の対象として存在していたことが理解できる。

あらたな問題が浮上する。では、フランス人ユゴーに英語系ヒューゴーである囂俄の 2 文字が当てられたのはなぜなのか。こちらについては、「ユゴーの漢訳名囂俄について」をご覧ください。

罫

【注】

- 1) レオポルド・マビヨオ著、神部孝訳『ヴィクトル・ユゴオ』新潮社1927.2.2
- 2) 『域外小説集』(上海・中華書局1936.12 / 1940.11三版)には、「戈里奇 (Maksim Gorjki)」とある。「著者事略」の「契訶夫」に出てくる。7頁
- 3) 樽本「林訳ユゴー」『林紘研究論集』所収
- 4) 韓一宇『清末民初漢訳法国文学研究 (1897-1916)』北京・中国社会科学出版社2008.6。69頁。韓によると、人々は『孤星淚』を林紘の翻訳だと誤り、さらにある研究者は林紘の翻訳に『哀史』があると書いているらしい。明らかに誤解である。「彼(施鰲存)は林紘がユゴーを「囂俄」と翻訳したと考えている。しかし、林紘がいつどの作品のユゴーを「囂俄」と翻訳したのかを明確に指摘してはいない」。韓一宇は、林訳についての誤解が広まっているという事実を述べている。

《外交小説 世界秘史》の原作

渡辺浩司

1

《小説大観》第三集(文明書局・中華書局,1915年12月1日)に《外交小説 世界秘史(一)》なる短篇小説が掲載された。“原序”(1-2頁)と“一 中國醇親王赴德謝罪之秘密”(2-15頁)に分かれている。原作者名が“美國埃倫阿布瓦特著”とあり、これは Allen Upward のことである。この原作が判明したので、本稿で報告する。

原作は、『Secret History of To-Day Being Revelations of a Diplomatic Spy』(Chapman and Hall,1904年(未見) 本稿では G.P.Putnam's Sons,1904年を使用)に収められ、“原序”部分は、「The Telegram Which Began the Boer War」冒頭の主人公の自己紹介(1-4頁)で、“一 中國醇親王赴德謝罪之秘密”は、「The Ruse of the Dowager Empress」である。

原作者 Allen Upward は、アメリカ人ではなく、イギリス人で、1863年生、1926年銃により自殺。30以上の著作があ



Secret History of To-Day

り、詩人・作家以外に法曹としても活動していた。

この原作『Secret History of To-Day』について、中村忠行「清末探偵小説史稿(二) - 翻訳を中心として - 」(『清末小説研究』第3号,1979年12月1日)では、《略史》(林琴南、陳家麟合訳,1920年2月 - 筆者未見)の原作であると述べる(26-29頁)*¹。しかし、そこで挙がっている《略史》の一部が原作に全く見られないのでおかしいと思っていた所、やはり誤りだったようで、『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄編,齊魯書社,2002年4月)では、《略史》の原作を『The Phantom Torpedo-Boats』(1905年 - 筆者未見)としている(11013*-1019*,435頁左)。

訳者の呉冰心については未詳。書名の下に“(一)”とあるので、その他の章も掲載する予定だったのであろう。だが、

未詳である。

2

原作は、主人公 V の一人称で語られる回想録という形式になっている。まず、中国語訳にも見える第1章冒頭の主人公の自己紹介について述べておく。内容は、回想を書くにあたって注意したことや、生まれてからこの仕事に就くまでのこと、更にこの仕事に就いてからのことを言い、地球上で起こった重大事のうち、自分が少しでも関わらなかったことはほとんど無いとまで述べている。そして自己紹介の最後には、進行中の大事件の中で、自分が舞台監督であるかのように - 脚光を浴び観客から注目され称賛されている着飾った役者の出入りを監督しながら、舞台袖で見つめているように - よく感じたと言っている。

なお、ここで、主人公はアメリカ出身だと述べている。恐らく、中国語訳者は、主人公 = 著者と勘違いし、著者をアメリカ人だと考えたのであろう。

次に本編「 The Ruse of the Dowager Empress 」のあらすじを紹介する。

義和団事件の少し前に、パリに the Company of the Joyous Peach Blossom なる組織があった。それは、中国の詩を研究するための文人の会だと自称していた。その組織については、フランス警察も注目していなかったが、私はいつか役に立つのではと考え、その情報を入手していた。

義和団事件が起こり、その和平交渉終結後まもなく、私はある紳士の訪問を受

けた。彼 (M.Caramel-Bignaud) は著名な若い詩人で、私は the Company of the Joyous Peach Blossom の会合における議長役としてその名に関心を持っていた。まず彼から、行き先や仕事内容に触れない、ただ長旅になるという依頼を受ける気はあるかと切り出された。私は、報酬が十分で、自由に拒否ができるならばと引き受ける。彼は条件をすべて受け入れ、いつ出発できるかと尋ねた。私が、欧米はすぐにでも、中国ならば準備に6時間かかるかと答えた所、彼は「中国」という言葉を聞いて驚いた。話は進み、行き先は Sing-fu で、西太后に会うという用件、信任状として黄色の絹に包まれた小さな箱に入った宝石を渡された。最後に私が彼の正体(the Company of the Joyous Peach Blossom のチーフ)を知っていることを口にする、彼は青くなって何も言わずに慌てて出ていった。

中国に到着し、外国人への憎しみが沸き立っている地方を通ったが、私は中国官僚の制服を着ていたので、安全・快適に Sing-fu に着いた。宮廷は、丘陵地のふもとの清流と果樹園の間に、軍隊のように野営という形で存在し、数多くの衛兵のテントに守られた中心に、偉大なドラゴンの旗がなびく大型のテントがあり、その中で西太后に謁見することになった。

会話は通訳係を通してフランス語で進められたが、西太后はその表情から私の話をすべて直接理解していると思われた。通訳係に言葉遣いを注意されつつ、私への依頼は次のようであった；義和団事件で外交官を殺害されたドイツ皇帝が怒り、

中国の皇族にベルリンまで謝罪に来るよう要求してきた、中国としてはそんな要求には従えないので、皇族と似た人(床屋の男で、作法等は教育済)を用意し、彼を皇族と偽らせてドイツに送ることにした、そこで、私に保護者として随行し、ドイツ側にばれないように取り計らってほしい、とのことであった。私は承諾し、西太后からお茶を賜るという栄誉も受けた。

私たち一行はドイツに到着した。この巡幸の重大事件として、ドイツ側からの叩頭(kowtow)の要求とそれに対する拒否があった。皇族の替え玉は全く萎縮しており、服従しそうであったが、本国から屈辱的な要求は拒否せよとの文書が届いていた。ベルリンの宮廷ではドイツ皇帝が盛装し、高官たちをずらりと整列させ、十分に威圧的であった。これまでに何度も依頼を受けたドイツ皇帝を目の前にし、私は皇族の替え玉のたどたどしい演説を聞きながら、少し神経質になっていた。また、私はドイツ側の演出を称賛しつつも、これが無駄になっていることを残念に思い、更に、本物の皇族が来ていれば、中国側も学ぶ所があったろうにとも思った。

この儀式の後、晩餐会が催された。替え玉はしぶしぶ出席したが、私は出席できなかった。彼の正体がドイツ皇帝に疑われるのではと思っていた所、パリの私の事務所から夜遅くに電報が届いた。内容は、ドイツ皇帝が至急、私にベルリンに来るよう求めているというものだった。ここで私は、西太后がなぜ私を雇ったか

に気付いた；西太后は私がドイツ皇帝お気に入りの探偵だと知っていて、替え玉が疑われた時にドイツ皇帝を騙すよう、前もって私を自分の側に置いたのである。私は悩んだ末に、中国官僚の服を着たまま、ドイツ皇帝を訪ねた。就寝中だったにもかかわらず、御前に通され、皇帝から意見が聞きたいと言われた。私は皇帝の話の遮り、真相を知っても、またそれで相手をこれ以上辱めても、何もならない、中国側が皇帝の前でかしくまったのだから目的は達した、と説得した上で、西太后の依頼で皇族に随行してきたのだとも明かした。皇帝は疑いを取り消したが、私を赦すか逮捕させるか迷っていると言いつつ、最後に、あの皇族は本当は誰なのかを教えれば、何も無かったことにすると言った。私が「あの方はもちろん皇帝の御兄弟で」と言いかけると、皇帝は私の肩をつかんで部屋から追い出した。

原作者 Allen Upward 自身が中国の詩や思想に影響を受けたそうなので、清朝側にかなり敬意を払った作品になっている。莫大な報酬を得た「私」はもちろんいいし、清・ドイツ両朝廷も面目を保てたのでよしとして、替え玉の男は帰朝後、どうなったのであろう。口封じのために、よくて幽閉、悪ければ抹殺、などと考えると気の毒になってくる。

3

中国語訳について述べる。加筆がとても多いことが言える。まず、冒頭の主人

公の自己紹介部分を挙げる。

The initials under which I write these confessions are not those of my real name, which I could not disclose without exposing myself to the revenge of formidable enemies. As it is, I run a very great risk in making revelations which affect some of the most powerful personages now living; and it is only by the exercise of the utmost discretion that I can hope to avoid giving offence in quarters in which the slightest disrespect is apt to have serious consequences. (1頁)

(私がこれらの告白を書く際に用いたイニシャルは私の実名のものではない、それを明かすことは恐るべき敵の復讐に身をさらすことになる。にもかかわらず、存命中の有力者に影響を及ぼすような暴露をするという、非常に大きな危険を私は冒している；結局のところ、ごくわずかの失礼が重大な結果を招く立場において、誰も怒らせたくないならば、最大限に慎重にならねばならないのである。)

原序云。余M某也。自參預歐美亞洲各國政局之機密。而爲國際偵探家以來。已不知經歷若干歲月矣。其間身歷之險阻艱難。與夫發見之不可思議

事實。殆不可僂指計。若任其深藏腦海。湮沒不彰。殊有忍俊不禁之概。蓋世界之名君賢臣。以及軍人政客。盛名炳彪。萬人崇拜者。若一揭其黑幕。則捭闔縱橫之政策。波譎雲詭之手腕。未有不令人瞠目結舌。拍掌稱奇者也。然而能揭此黑幕者。舍余其誰。爰是不顧危險。不避嫌怨。擇近頃歷史上重要之事實。記述數則。公諸於世。惟其間頗有關係於現今存在之大勢力人物。一旦暴露其真相。其憤余爲何如。加以行文記事。少觸忌諱。危機立至。爲自全計。故不得不用M某之隱名焉。(1頁,句点は原文のまま)

(原作の序には次のようにある：私はM某である。欧米・アジア各国の政局の機密に関わり、国際的な探偵業に就いてからすでにどれほどの歳月が経ったであろうか。この間に自ら体験した危険や困難、実見した不可思議な事実は、指を折っては数え切れないほどである。これを記憶に留め、埋没させておくのは、大変もどかしい気がする。世界の名君・賢臣・軍人・政客で、評判を誇り、万人から崇拜されている人について、もしその隠れた部分を公にすれば、その合従連衡の政策や変幻自在の手腕に、誰もが目を見張り舌を巻き、手を打ってほめたたえるであろう。その隠れた部分を公にできるのは、私以外に誰がしようか。そこで危険を顧みず、自ら憎まれ役になり、最近の重大事を選んで、いくつか記し、

世間に公表することにした。ただ、中には存命中の有力者に深く関わる事もあり、一旦その真相が暴露されれば、私に向けられる怒りは大変なものになる。それに、書いた内容がわずかでもタブーに触れると、すぐに危険な状況になるので、自分を守る策を考えた。それ故、M某という匿名を使わざるを得なかったのである。))

原作は本物らしくするために主人公の逃げ口上から始まるが、中国語訳は自由に加筆し、くどくどしいほどである。次に、一行がドイツへ出発する部分を挙げる。

Of our journey westward it is needless for me to write, since our progress was fully reported in the barbarian press.(184頁)
(我々の西洋行については書くべきことは無い、なぜならこの巡幸はあちらの新聞で十分に報道されたからだ。)

至期。假親王率領一千隨員僕役。由京而津而滬。此時之余。固不待言。隨員中有長身隆鼻。衣冠被體。顯呈異狀者。即余是也。數聲汽笛。黃浦送行。濟濟蹣蹣之中國官吏。齊集江濱。恭送如儀。余不知此一行官吏中。有識此親王爲膺鼎者否。舟出吳淞。取道歐洲航線而進。途中情節。早經中西各報紙詳細記載。委瑣不遺。無俟余更爲陳述。(10頁)

(出発日になり、にせ親王は同行の随員・下僕を従え、北京を通り、天津、上海へ進んだ。この時の私はもう言うまでもなからう。随員の中で、背が高く鼻が高く、官衣で身を包み、はっきりと浮いた存在、それが私だった。汽笛が数回鳴り、黄浦江で見送られたが、大勢の足並みを揃えた役人が川岸に居並び、儀式を行なうように恭しく見送ってくれた。さてこの役人達の中にこの親王がにせ者だと知っている者はいるのだろうか。船は吳淞口を離れ、ヨーロッパ航路を進んでいった。途中の出来事はとくに中国やヨーロッパの新聞が詳細に記事にしており、何も残っておらず、私がこれ以上話すこともない。)

訳者の方が当然、中国地理に詳しいので、細かく加筆したのであろう。もう1例、最後の部分を挙げる。

' He is, of course, sire, the brother of his Imperial Maj

Wilhelm . strode to me, seized me by the shoulders, and thrust me out of the room.(190頁)

(「あの方はもちろん皇帝の御兄弟で」)

Wilhelm 2世は大股で近づき、私の両肩をぐいとつかみ、私を部屋から押し出した。)

曰：“彼乃中國皇帝之弟。醇親王殿下耳。復何言。”德皇嘻然。拊肩語余曰：“黠哉卿也。”遂推余外出。自返宮中。一天雲霧。從此冰消。余之職務盡。余亦可以息肩矣。此後如何。與余絶無關係。不再闖入吾書。當爲讀者諸君所諒也。(15頁,コロン・引用符は補った)

(私は)言った：「あの方は中国皇帝の弟御、醇親王殿下です、それだけです。」ドイツ皇帝は笑って私の肩をたたき：「ずるい奴だな。」そして私を外に押し出した。宮殿に帰る時、空の雲霧はすっかり消えていた。私の役目は終わり、ほっとすることができた。このあとどうなったのかは、私と無関係なので、これ以上続きは無い。読者諸君におかれては諒とされたい。)

このように中国語訳には、他にも加筆がしばしば見られる。

また、加筆よりはずっと少ないが、省略や誤りも見える。単語の誤りを1例示す。原作は、主人公の名を「Monsieur V」(1頁,188頁)や「M.V」(190頁)とするが、中国語訳は上述のように“M某”としている。直訳すれば「V某」にでもなるはずだが、Vだと発音しにくいから変えたのであろうか。

4

Upward作品の中国語訳については、
『Secrets of the Courts of Europe』

(1897年)*²所収の諸篇が、日本語訳の『外交奇譚』(徳富蘆花訳述,1898年)を通して、晩清期(1902-1904年)にもうすでに登場している。しかし、清朝宮廷が舞台となる本作は、朝廷を嘲笑したものではないけれども、清朝が倒れるまでは決して公にはできなかった類の作品である。その意味で、この《外交小説 世界秘史》は、時代の変化を実感できる翻訳と言えよう。 罫

【注】

- 1) 同文では、Upward について、「ロンドンの名門校ミドル・テンプル(Sch.Middle Temple.)やブルーク校(Brooke Sch.)で法律・哲学を修め」と述べている(27頁)。しかし、別の紹介では、両校に言及は無く、ダブリンの the Royal University of Ireland に通ったとされている(Mary A. O'Toole 執筆「Allen Upward」269頁等)。
- 2) 参考文献に掲げた Mary A. O'Toole 執筆「Allen Upward」(268頁)と Scot Peacock(Managing Editor)『Contemporary Authors』Volume187(399頁)は、ともに書名の“Courts”を“Counts”に誤る。

【参考文献・ホームページ(HP)】

Jennifer Baise 編『Twentieth-Century Literary Criticism』Volume85, Gale Research,1999年
Hal May 編『Contemporary Authors』Volume117,Gale Research Company,

1986年

Mary A. O'Toole 執筆「Allen Upward」
- Thomas F. Staley 編『British
Novelists, 1890-1929; Modernists』
(Dictionary of Literary Biography
Volume 36) Gale Research Company,
1985年

Scot Peacock (Managing Editor) 『Contemporary
Authors』 Volume 187, Gale Group,
Inc., 2000年

中村忠行「清末探偵小説史稿(三・完) -
翻訳を中心として - 」『清末小説研
究』第4号, 1980年12月1日

William G. Contento 管理 HP 「The
Fiction Mags Index」
[http://www.philsp.com/homeville/FM
1/0start.htm](http://www.philsp.com/homeville/FM1/0start.htm) (2009年10月10日確認)

『清末小説』第32号

曾孟樸の初期翻訳(上) 樽本照雄
林訳小説《紅篋記》などの原作(上)

..... 渡辺浩司

林紓與柯南·道爾其他小説の翻譯 ... 郝 嵐
書家としての呉禱 沢本香子

嗣《瀛寰鎖記》之《屑玉叢談》 ... 田 若虹
《盛京時報》近代小説簡目

..... 張永芳 王金城 馮濤

李伯元遺稿(11) 李錫奇『南亭回憶錄』

より

樽本照雄 著

林紓研究論集

A5判 上製 箱入り 409頁 限定150部 定価: 8,400円

對蔡元培 答林君琴南函 的一點質疑

李 慶 國

林紓於1919年3月18日在北京《公言報》上發表了 林琴南致蔡鶴卿書 , 以公開信的方式表述了他對新文化運動及古文存廢的立場和觀點, 向新文化陣營正面發起了反擊*1。對此, 蔡元培也迅速作出回應, 三天後即在《北京大學日刊》上發表了 答林君琴南函 *2。這兩封公開信是以林紓為代表的文化保守主義*3和新文化陣營之間公開論戰的重要文章, 客觀上對新文化運動的展開產生了積極的影響。

最近, 在梳理和研討新文化運動和五四文學革命的文獻中, 重新翻閱了林紓和蔡元培的兩封公開信, 發現了一個以往在閱讀中被忽略的問題, 本文擬就這一問題談點個人的看法, 以期拋磚引玉, 引起研究者們的注意。

蔡元培在 答林君琴南函 的信中開頭寫道: “公書語長心重, 深以外間謠諑紛集, 為北京大學惜, 甚感。惟謠諑必非實錄, 公愛大學, 為之辨正可也。今據此紛集之謠諑, 而加以責備, 將使耳食之徒, 益信謠諑為實錄, 豈公愛大學之本意乎? 原公之所責備者, 不外兩點: 一曰, ‘覆孔孟, 鑿倫

常。’二曰，‘儘廢古書，行用土語為文字。’請分別論之”。首先，蔡元培否認林紓所聽外間謠諑，並軟中帶硬指責林紓，如若出於對大學的愛心，則應為之辨正，而非據謠諑責備之，這樣只能淆亂視聽，擴大謠諑的負面影響。因而，林紓基於謠諑的指責就成了無的放矢，也無道理可言。

接著，蔡信又說，“對於第一點，當先為兩種考察：(甲)北京大學教員，曾有‘覆孔孟，鐘倫常’教授學生者乎？(乙)北京大學教授，曾有於學校以外，發表其“覆孔孟，鐘倫常”之言論者乎？則試問有誰何教員，曾有何書，何雜誌，為父子相夷，兄弟相關，夫婦無別，朋友不信之主張者？曾於何書，何雜誌，為不仁，不義，不智，不信，及無禮之主張者？”然後，蔡信逐條落實，先察“覆孔孟”之說，次察“鐘倫常”之說，可有北大教員教授學生或曾於學校之外發表此言論者否？並且申明“若大學教員，於學校以外，自由發表意見，與學校無涉，本可置之不論”。即便如此，如有，請出示證據。

對於第二點，蔡信又分為三種考察：“(甲)北京大學是否已儘廢古文而專用白話？(乙)白話果是否能達古書之義？(丙)大學少數教員所提倡之白話的文字，是否與引車賣漿者所操之語相等？”隨之，蔡信依次列舉北京大學是否已儘廢古文而專用白話，結論自然是否定的。不僅預科的國文課本都是古文，而且本科中的中國文學史、西洋文學史、中國古代文學、中古文學、近世文學以及文字學，“其編成講義而付印者，皆文言也”。並說，“所可指為白話體者，惟胡適之君之《中國古代哲學史大綱》而其中所引古書，多屬原文，非皆白話也”；接著考察“‘白話是否能達古書之

義’？大學教員所編之講義，固皆文言矣。而上講壇後，決不能以背誦講義塞責，必有賴於白話之講演。豈講演之語，必皆編為文言而後可歟？”並且舉例說，“吾輩少時，讀《四書集注》、《十三經註疏》，使塾師不以白話講演之，而編為類似集注，類似註疏之文言以相授，吾輩其能解乎？”之後，又進一步考察‘大學少數教員所提倡之白話的文字，是否與引車賣漿者所操之語相等。’白話與文言，形式不同而已，內容一也”。還以嚴復的譯著和林紓的翻譯小說為例，指出原著均為白話，“公能謂公及嚴君之所譯，高出於原本乎？”進而為北大和《新青年》同仁申辯，“北京大學教員中，善作白話文者，為胡適之，錢玄同，周啟孟諸君。公何以證知為非博極群書，非能作古文，而僅以白話藏拙者？胡君家世從學，其舊作古文，雖不多見，然即其所作《中國哲學史大綱》言之，其了解古書之眼光，不讓於清代乾嘉學者。錢君所作之《文字學講義》、《學術文通論》，皆古雅之古文。周君所譯之《域外小說》，則文筆之古奧，非淺學者所能解。然則公何寬於《水滸》、《紅樓》之作者，而苟於同時之胡錢周諸君耶？”

原文引用有點長，一是為了使讀者對蔡信歸納的問題有一個基本的了解；二是後面還要對此作以分析。這裡，筆者要指出的是，林信中提出的問題和蔡信中所歸納出來的問題有著明顯的不同。簡而言之，即蔡信答非所問，改換概念，曲解了林信的原意，進而強化了林紓據謠諑來攻擊北大和新文學倡導者、且態度蠻橫無理之印象。

首先，林紓所說的“覆孔孟，鐘倫常”是從整個思想、文化界的社會現象而言，

並非特指北大教員,是針對“覆孔孟,鑿倫常”是否為社會發展之需要,能否強國提出質疑。原文如下:

晚清之末造,慨世者恒曰:去科舉,停資格,廢八股,斬豚尾,復天足,逐滿人,撲專制,整軍備,則中國必強。今百凡皆逐矣,強又安在?於是更進一解,必覆孔孟,鑿倫常為快。

林紓的本意是說以孔孟為代表的儒家思想文化和傳統倫理道德並非中國積弱的原因所在,即使打倒孔孟,剷除“五常之道”,也不能使“中國必強”。而“外國不知孔孟,然崇仁,仗義,守信,尚智,守禮,五常之道,未嘗悖也”。並從其自身的譯作來看,“實未見中有違忤五常之語,何時賢乃有此叛親蔑倫之論,此其得諸西人乎?”然而,蔡信並沒有正面回答林信提出的有否需要“覆孔孟,鑿倫常”,而是追詰北大教員有何人如此教授學生,又有何人發表此一言論?從邏輯上來看,兩者已發生了概念轉換。

其次,蔡信歸納的第二個問題是“儘廢古書,行用土語為文字”,然後,作了三種考察,即北京大學是否已儘廢古文而專用白話?白話是否能達古書之義?以及大學少數教員所提倡之白話的文字,是否與引車賣漿者所操之語相等?這也和林信原意明顯不符。試看林紓的原文,他說:

若儘廢古書,行用土語為文字,則都下引車賣漿之徒,所操之語,按之皆有文法,不類閩廣人為無文法之啾啾,據此則凡京津之稗販,均可用為教授矣。

蔡信從這段話中摘取“儘廢古書,行用土語為文字”一句,並將林信此句中表

示假定功能的“若”字去掉,使句子變成了一般陳述。林信表述的是對“儘廢古書”^{*4}的憂慮和不可為之的理由,但蔡信卻改換成林信誣陷北大“儘廢古文而專用白話”(注意,林信原文並無此話-筆者),並就北大“是否已儘廢古文而專用白話”來舉證申辯。值得注意的是,林紓最初提出的“若儘廢古書”,在蔡信中先變成“儘廢古書”,進而又變成“已儘廢古文”了,即由原來的假定句式變成陳述句式,再變成已然句式。如此將句式轉換之後,由蔡信那看似嚴謹的逐條批駁和舉證推導出來的結論,只能是林紓輕信謠言並給北大潑污了。

林信原文其實表述得並不複雜,“若儘廢古書”,那麼要學問還有何用,會白話者誰人都可為教授了。儘管林紓說得有些刻薄甚至極端,特別是他那句“引車賣漿之徒所操之語”長久以來一直被人詬病^{*5}。但如果我們不是斷章取義,也不帶先入為主的任何成見,而是理性地、平靜地仔細閱讀這段話,相信不會出現太大的理解歧義。換句話說,可能更好懂。這就是並非會說普通話的人都能教普通話?沒有詞彙、語法和音韻學的基礎知識,只是會說漢語就能教漢語嗎?林紓所說的“引車賣漿之徒所操之語”並非侮蔑普通勞動者,相信象林紓這樣一個從小就生活在貧寒困頓之家,到老仍靠賣文鬻畫來維持生計的人,是不會嘲弄那些為生存而操勞奔波的勞動者的,他所說的是白話也並非普通的白話,而是以古文為基礎的白話,是由口語提煉而成的書面語。因而,他強調“非讀破萬卷,不能為古文,亦並不能為白話”。他主張古文古書不可全廢,用白話全面代替古文

必將毀了古文也毀了白話。

最後,蔡信為北大教員中“善作白話文者”的胡適之、錢玄同和周作人諸君辯,說“公何以證知為非博極群書,非能作古文,而僅以白話藏拙者?”如果單從蔡信來看,讀者會以為林信指責胡適等人“為非博極群書,非能作古文,而僅以白話藏拙者”。其實,讀遍林信也找不到這樣的指責,這是蔡信對林紓“非讀破萬卷,不能為古文,亦並不能為白話”的恣意歪曲,更有甚者,蔡信還將“大學少數教員所提倡之白話的文字,是否與引車賣漿者所操之語相等”作為“考察”的內容之一。這也是蔡信強加給林紓的所謂“指責”,即北大“少數教員所倡之白話的文字”和“引車賣漿者所操之語相等”。蔡信再來對一個無中生有的“指責”考察“是否”實有,結論不言自明。

林紓讀了蔡信之後,於3月24日在《公言報》上又發表了林琴南再答蔡鶴卿書。信中道:“顧比年以來,惡聲盈耳,至使人難忍,因於答書中孟浪進言。既得復書,足見我公宗聖明倫之宗旨,始終未背也。此外尚有何說?弟所求者,存孔子之道統也。來書言尊孔子矣。所求者,倫常之關係也。來書言不悖倫常矣。所求者,古文之不宜摒棄也。來書言仍用古文矣。鑿心遂欲暢,遂無言。至於傳聞失實,弟拾以為言,不無過聽,幸公恕之”^{*6}。林紓在這裡公開向蔡元培表示了自己“孟浪進言”和“不無過聽”的歉意,並且作了四點確認:一,“宗聖明倫之宗旨始終未背也”;二,“言尊孔子矣”;三,“言不悖倫常矣”;四,“言仍用古文矣”。既然先生有如上表示,吾“尚有何說?”以蔡元培當時

在北大、在全國、在新文化運動中的地位 and 影響來看,林紓的四條確認,從鉗制新文化運動中的過激主義,維護中國傳統文化和道德倫理及文言存續來說,還是有著特殊意義的。

以往的現代文學史和教科書對蔡元培的答林君琴南函幾乎都是眾口一詞的讚譽,但卻缺少細緻地比照閱讀和具體分析。甚至一些在林紓研究上頗有成就的學者也未能免此紕漏,如林薇在《百年沉浮 - 林紓研究綜述》中寫道:“蔡元培的復函義正詞嚴,林紓理屈詞窮”^{*7}。王楓

林紓:拼我殘年,極力衛道 文中稱答林君琴南函,“該文堪稱經心之作,邏輯嚴密,舉證充分”^{*8}。著名的林紓研究專家張俊才先生在《林紓評傳》中也寫道:“蔡氏此文真正是心平氣和、雍容大度,首先在風格和氣量上就讓林紓佔了下風。蔡元培一方面列舉大量事實,說明北大的課程設置和教材內容中並無林紓所說的‘覆孔孟,鑿倫常’及‘儘廢古書’之事,另一方面則委婉地批評林紓……”^{*9}。這和筆者的閱讀感受有很大的不同,筆者實在不知道蔡信的“邏輯嚴密”從何而言?也不清楚蔡信改換概念,轉移論題作法和“心平氣和,雍容大度”的論辯態度有何關係?

重讀林紓和蔡元培的兩封公開信,獲益匪淺,不僅使筆者發現了以往閱讀中不應有的忽略,而且重溫了蔡元培借公開信闡明的“循‘思想自由’原則,取兼容并包主義”的學術思想和大學的教育理念,這一名言對於今日中國仍有它的現實意義。同時,筆者也感念林紓的兩個著名論斷:“非讀破萬卷,不能為古文,亦並不能為白

話”、“須知天下之理,不能就便而奪常,亦不能取快而滋弊”,雖穿越九十載時空仍新鮮而不朽。 ㊦

【注】

- 1) 當1917年1月1日胡適在《新青年》第2卷第5號發表 文學改良芻議 後,林紓也迅速作出反應,寫下 論古文之不宜廢 的短文,表達了對儘廢古文的憂慮,呼籲“古文之不宜廢”,但對於不宜廢的深層理由則尚未釐清,他坦誠道:“吾識其理,乃不能道其所以然”。結果被胡適譏為不值一駁。1919年2、3月間林紓在上海的《新申報》上發表了文言小説 荊生 和 妖夢 。這兩篇小説都是一時的泄憤之作,是對《新青年》的“雙簧戲”及長久以來新文學倡導者對他的詆毀和嘲弄作出的回擊。由於有明顯的影射和謾罵之嫌,不僅沒能清楚表達出他的觀點和主張,反而使他陷入了新文化陣營更大規模的攻擊和圍剿之中。在 妖夢 中他暗諷北大,對蔡元培的支持態度心懷不滿。然而,為何選擇致蔡公開信的形式,這和 妖夢 未發之前蔡來信請他為劉應秋先生遺著代為品題有關,他想追回小説已來不及,索性公開正面立論,闡明自己的觀點和向蔡進言。
- 2) 載1919年3月21日《北京大學日刊》,見《中國現代文學史參考資料·文學運動史料選》第1冊,上海教育出版社,1979年5月。
- 3) 對於林紓在五四時期是否屬於文化保守主義,學界也有爭議。王富仁在 林紓現象與“文化保守主義” (代序)

一文中認為“林紓在‘五四’新文化運動過程中的表現不屬於‘文化保守主義’的範疇,而更帶有文化專制主義的色彩”(見張俊才《林紓評傳》,北京中華書局,2007年4月)。將林紓劃為“文化專制主義”的範疇,顯然有違當時的歷史環境,因為林紓的言論並不代表當時的主流意識形態的權利話語,林紓的小説 荊生 和 妖夢 儘管有影射和人身攻擊之嫌,但也只能算作遊戲筆墨,泄一時之憤而已。況且,如果沒有錢玄同和劉半農詆毀和嘲弄他的“雙簧戲”和“桐城謬種”的罵詈在先,恐怕也就沒有了林紓的遊戲筆墨,因而,把林紓劃入封建專制主義的主流話語是筆者不能接受的。如果按照這樣的說法,林紓恐怕就得戴著“封建復古派”、“封建餘孽”等大帽子留在文學史上了。

- 4) 林紓在信中使用了“古書”和“古文”兩個概念,如“若儘廢古書,行用土語為文字”和“若讀原書,則又不能全廢古文矣”。蔡元培在信中先是歸納為兩點:其二為“儘廢古書,行用土語為文字”,後面在對第二點進行考察時,寫為“北京大學是否已儘廢古文而專用白話?”。
- 5) 如魯迅在 論照相之類 ,還引林紓的“引車賣漿者流”一句,暗諷林紓。見《魯迅全集》第1卷,人民文學出版社,1981年,頁190。
- 6) 原載1919年3月24日北京《公言報》,原文引自樽本照雄《林紓冤罪事件簿》中 林紓を罵る快樂 (咒罵林紓的快樂)一文載1919年3月26日《時報》的

轉載。日本清末小説研究會,2008年3月。
頁127。

- 7) 見林薇《百年沉浮 - 林紓研究綜述》,天津教育出版社,1990年10月。頁25。
- 8) 見陳平原、夏曉紅主編《觸摸歷史:五四人物與現代中國》,廣州出版社,1999年4月。頁312。
- 9) 張俊才《林紓評傳》,北京中華書局,2007年4月。頁229。

『繡像小説』問題

汪家燊『中国出版通史』7清代卷(下)(北京・中国書籍出版社2008.12)が刊行された。清末時期を対象とするから『繡像小説』についても説明がある。いうまでもなく、『繡像小説』は上海の商務印書館が刊行した小説専門雑誌として有名だ。発行順でいえば梁啓超が日本横浜で創刊した『新小説』につぐ。上海における小説専門雑誌流行のさきがけとなった。

『繡像小説』には、複数の問題がある。ここでは、そのなかのふたつの事柄を取り上げたい。長年にわたって論争が続いてきた課題でもある。

ひとつは、『繡像小説』の発行が遅延していたという事実だ。

主編李伯元の死去と同時に該誌は停刊した。光緒三十二(1906)年三月である。これが1980年代までの定説であった。しかし、発行情況を新聞雑誌の広告で追跡していくと徐々に遅れていることが判明する。光緒三十二年三月ではなく同年年末に停刊した。新暦に換算すれば1907年1月下旬から2月上旬になる。これが私の結論だ。汪家燊は、該通史においてこちらの発行遅延説には同意している。彼は、「在1907年2月停刊」、あるいは「於1907年1月停刊」(343頁)と書く。記述がブレるのはしかたがない。創刊号に年月が記載されているのとは異なる。刊行

途中で雑誌本体に刊年を明示しなくなった。おおよその停刊期日がわかるだけ。汪家燊の説明は、結局のところ私のいう光緒三十二年年末と一致している。発行遅延について論争の過程は省略して結論だけをのべると以上ようになる。

もうひとつは、該誌の主編は李伯元であるか否かという問題だ。『繡像小説』の編者問題ともいう。

1980年代に汪家燊が最初に異議をとらえた。主編は李伯元である、というそれまでの定説を否定した。彼が勤務していた商務印書館の内部資料には証拠となる文献が存在しないらしい。主編は李伯元ではないという汪家燊の主張は、状況証拠にもとづいている。李が『繡像小説』を編集したとは誰も言っていない、と。李伯元の友人関係者による証言を根拠とする。間接的だから状況証拠だ。

それに対して、2件の資料が提出された。

上海郵便司の記録(1905)が1件ある。主宰者が李伯元だと登記されている。

当時、一般に知られていたのは南亭、あるいは南亭亭長という筆名でしかなかった。『繡像小説』にも李伯元の名前がない(だから論争になっている)。にもかかわらず、記録には「李伯元」の名前がある。南亭が李伯元だと知っているのは商務印書館内部の人間に違いない。そういう資料があること自体に意味がある。基本的に信用できる資料だと私は考える。

汪家燊は、その記録が実在していることを自分で確認したうえで、内容が信用できないと判定した(『出版史料』1990年第4期)。記述が正確ではない、と文句をつけるだけ。反論になっていない。

資料の2件目は、決定的な証拠である。

商務印書館は、新聞広告を重視していた。自社の刊行物を宣伝するため大量の広告を複数の新聞に掲載するのだ。1907年の新聞広告である。広告のなかのひとつに「本館前刊繡像小説特延南亭亭長李君伯元総司編著」と書いたものがある。南亭亭長李伯元を特に招いて編著のすべてをまかせた、という。

『繡像小説』は、商務印書館の刊行物ではあるが、その編集体制は独立したかたちであったことがわかる。李伯元にまかせた、というのだから李伯元は該誌の主編であった。広告主は、『繡像小説』の版元である商務印書館にほかならない。よく見てほしい。これを「動かぬ証拠」という。

だが、汪家燊は、そうは考えない。今回、該書でなんと説明しているか。「しかし、それまで商務印

書館が『繡像小説』の販売に天地をおおうほどに行なった広告すべてに、李[伯元]をあげたものはずっとなかった。これはただの薄弱な証拠にすぎない[但以往所有商務印書館鋪天蓋地的推銷《繡像小説》的廣告從來沒有提過李，這只是一則孤証]」(344頁)。

「薄弱な証拠」だと強調するため、汪家燊は、続けてつぎのように書く。「李伯元が1906年3月*1に病気で亡くなった19ヵ月後の広告であり、掲載した翌日には撤回している(当時『申報』の第1面を見ると、商務印書館が広告を掲載すれば同一の広告を数日連続して出していた)[在李伯元1906年3月病逝19個月後發的廣告，并且登了一天第二天就撤了(從當時《申報》第一版看，商務印書館刊登廣告都是接連幾天刊發同一廣告)]」(同上)というのだ。

汪家燊の書き方からすると、新聞に1回のみ掲載された広告だということになる。だが、これは事実ではない。

問題の広告は、少なくとも以下の新聞に複数回掲載された。1907年『神州日報』(8.17)*2、『中外日報』(10.9)、『時報』(10.9、12)など。判明しているだけでこれだけの広告がある。

汪家燊は、『申報』を例にあげる。しかし、これは不適切である。なぜなら、上の商務印書館自社広告が掲載されたのは『申報』ではないからだ。立論の根拠にはならない。

くりかえす。李伯元が『繡像小説』の主編であることを明示した決定的で動かない証拠がある。すなわち、商務印書館が出稿した新聞広告だ。しかし、汪家燊はその直接証拠を否認し、間接的な状況証拠にしがみつく。彼は資料についての判断を間違っているといわざるをえない。(樽本照雄)

【注】

- 1) 李伯元の死去を「1906年3月」と表記して、あたかも新暦のように読める。ここの「3月」は旧暦だ。旧暦新暦混用の例である。正確な月日は、三月十四日(4.7)。
- 2) 文迎霞論文による。文迎霞「關於《繡像小説》の刊行、停刊和編者」(『華東師範大学学报(哲学社会科学版)』第38卷第3期2006.5.15)。なお、次も参照のこと。樽本「『繡像小説』研究の現在」(『清末小説から』第89号2008.4.1)。樽本「『繡像小説』編者問題の結末」『清末小説叢考』2003所収

近代小説《慨生游志》系

《老残游记》の仿作

張 永 芳

人们在观赏文艺作品或体育比赛时，常常会将自身置于其中，甚至想取代作者或运动员自己登场、自作安排。一部作品或一场比赛越是引人关注，越是容易发生这种“代偿”心理；反过来说，如果观赏者无动于衷，就证明这部作品或这场比赛没有撩动人心。从这个意义上讲，一部作品有仿作或续作，未必是坏事。任何文学作品在流传过程中如果广受欢迎的话，必然会出现续作和仿作，这些续作和仿作在文学品位上几乎很难与原作比肩，但其出现实际是特殊的评论方式，是用“模拟创作”来表达续作者、仿作者的社会观念与文学观念，其意义远比一般的批评更为宽泛。这种文学现象，我们当然不应忽略。提起近代著名小说，《老残游记》似乎最有名气，自然也难免有续作。据刘蕙孙《老残游记补篇·引言》，二十世纪初年有一本伪造的《老残游记》，编出版者为百新书局傅某，执笔人则是陈莲痕。后来找到了刘鹗先生的二编剪贴本九回，单行本散页六回，即《老残游记·二集》，刘蕙孙先生自己也补写了十一回，共凑成二

十回，以《老残游记补篇》的名称，由“文化艺术出版社于1982年出版。除陈莲痕的“伪本”与刘蕙孙的“续书”外，还有没有其他的仿本和续书呢？据樽本照雄《新编增补清末民初小说目录》，尚有杨尘因的《老残新游记》刊于《快活》杂志(1922?)，并由上海世界书局出版单行本(1924)。笔者在梳理《盛京时报》近代小说的时候，又读到一部小说《慨生游志》，认为它明显系《老残游记》的仿作。

《慨生游志》始刊于1914年7月30日，终刊于9月18日，共载42期。无署名，刊于《盛京时报》“小说”专栏，为白话长篇社会小说。

查《老残游记》始刊于1903年的《绣像小说》，1906年又在《天津日日新闻》重新刊出(见附注)。除报刊发表外，至1914年至少有天津日日新闻本(无出版年月，但专家推断最早问世)、上海神州日报馆本(1907)、商务印书馆本(1912、1913)、上海图书馆本(1913)、上海广益书局本(1913)等多种印本问世。《慨生游志》属后出，自然完全可能模仿《老残游记》，或仅仅是为报纸连载而改写原作。两者的相关性，可从以下几方面来比较。

其一，两者主体相似。

《慨生游志》对主人公的介绍是：

话说着一人姓娄名寄，号慨生。年纪不过三十七岁。原籍江西人氏，腹中学问很好。原先他父亲，也是个在政界上的，只因性情古拙，不合时宜，虽然做了不少年的官，仍是个两袖清风，一无所有，后来卒以贫困终身。这慨生既无祖业可守，又无事业

可做，饥寒的景况，相逼而来。正在无可如何，忽然来了一个摇串铃老道，自言曾受异人传授，能治百病。这慨生遂即拜他为师，学了几个口诀，从此也就到处周游，给人治病糊口去了。

《老残游记》对主人公的交代是：

却说那年有个游客，名叫老残。此人原姓铁，单名一个英字，号补残。因羡慕懒残和尚煨芋的故事，遂取这“残”字做号……这“老残”二字便成了个别号了。他年纪不过三十多岁，原是江南人氏。当年也曾度过几句诗书，因八股文章做得不通，所以学也未曾进得一个。教书没人要他，学生意又嫌岁数大，不中用了。其先他的父亲原也是个三四品的官，因性情迂拙，不会要钱，所以做了二十年的实缺，回家仍是卖了袍褂做的盘川。你想，可有余资给他儿子应用呢？这老残既无祖业可守，又无行当可做，自然“饥寒”二字渐渐的相逼来了。正在无可如何，可巧天不绝人，来了一个摇串铃的道士，说是曾受异人传授，能治百病。街上人找他治病，百治百效。所以这老残就拜他为师，学了几个口诀，从此也就摇个串铃，替人治病糊口去了。

两相比较，明显有模拟痕迹。特别是划线的字句，可谓渊源有自。两位主人公都是江西人、都是走方郎中、都在山东游历，虽改了姓名，但籍贯、才艺和身世几乎完全相同。

其二，两者情节相似。

且看慨生出场后的经历：来到山东，为李绅士治好“怪病”——皮肤溃烂；走到济南，亲历了人们争听金家双凤演唱大鼓书词的空前盛况，领略到她们演唱艺术的独特魅力；为抚院文案高雅青小妾治好嗓子重症，名动一时，高雅青向张宫保(巡抚)推荐慨生，宫保召见，慨生面陈治河之策；去曹州探亲，听乡民谈论蒋太守的政绩，评说“清官”的狠毒，讲述财主李瑞福全家被冤害的情状等；遇见旧识谢振邦，他刚被委任为城武县令，慨生与其谈说蒋知府“不过是个下流酷吏而已”，并举荐颜侠秋维持地方治安；慨生在东昌住了几日，又返回济南，在齐河县遇见老友治河官员同知穆海仁，先商议赎妓之事，后谈说苏家十三人同时毙命的奇案；助专使姜某勘破苏家奇案，并进山寻访道长，讨回解药返魂香，将已经安葬的死者一一搬出，焚起返魂香，使十三个受害者死而复生。

《老残游记》的情节，也大体是这个顺序，只是人名稍有不同。患皮肤病的大户，叫黄瑞和；唱大鼓书的姐妹，叫黑妞与白妞；宫保文案叫高绍殷；宫保姓庄；曹州知府名玉贤；城武县令叫申东造；被举荐的侠客叫刘仁甫；同知叫黄人瑞；发生灭门案的是贾家；审案的酷吏是刚弼(《慨生游志》中的酷吏为方某)。只是《老残游记》的叙事更加婉曲完整，另有《慨生游志》所没有的情节。可以明显看出，《慨生游志》是《老残游记》的缩写版、改写本，比原作更加简洁、朴实一些。

其三，两者中有多处引文相同，特别是诗作，完全一样。

如故事主人公在曹州客舍的题诗云：“得失沦肌髓，因之急事功；冤埋城阙暗，血染顶珠红。处处鸺鹠雨，山山虎豹风。杀民如杀贼，太守是元戎”。两者诗句全同，只是《老残游记》下题：“江南徐州铁英题”；《慨生游志》下题：“江西南昌娄寄题”。再如于齐河县，故事主人公题写了一首咏叹黄河赛冰的五言古诗，《老残游记》云：

人瑞看了，说道“好诗！好诗！为甚不题落款呢？”老残道：“题个江右黄人瑞罢。”人瑞道：“那可要不得！冒了个会做诗的名，担了个挟妓饮酒革职的处分，有点不合算。”老残便题了“补残”二字，跳下炕来。

《慨生游志》则云：

静希看完，连道“好诗！好诗！为甚么不题落款哪？”我道：“就题个江南穆静希罢。”静希道：“那可使得不得！冒了个会做诗的名，那是了不得的。”我当时随题了“慨生”二字。

顺便说一下，《老残游记》乃第三人称限制视角的写法，虽用主人公的视线、感觉描写外物，却仍用第三人称，以“老残”为主体；《慨生游志》开始仍用此笔法，但写着写着便改为第一人称叙写，径自以“我”来取代慨生了。

其四，都揭示了“清官”为祸之惨烈。

《老残游记》塑造了玉贤、刚弼两个貌似清官实为酷吏的形象，认为他们“不

过是下流的酷吏，又比鄧都、甯成等人次一等了”。《慨生游志》则以蒋太守和方某两位酷吏为抨击对象，也认为他们“不过是个下流酷吏而已”。这是极其深刻的认识，是对千年来中国政风的又一种思考。

从思想内涵来说，《慨生游志》远远不及《老残游记》，特别是删去了破船的隐喻和黄龙子论道的章节，故事更加紧凑了，空洞的议论减少了，可对清末局势的认识也大大减色了。

要之，《慨生游志》是对《老残游记》的仿作，采用缩编、改写(如变换人名)的方式，将原作骨干部分呈示给读者。其价值固然不及原著，但正反映出原作的巨大影响力。仿作者至少十分喜爱原著，方才有意将改作刊布于报端。

另外，这种游记体小说之形式与题材，也很值得注意。《盛京时报》在《慨生游志》之前发表过《探险英雄传》(1907年4月)、《毒洲探险记》(1908年11月)，之后发表过《幼童旅行》(1915年1月)，并非偶然现象，至少反映了当时人了解外域情状的渴念。 罍

【附注】据刘德隆等编《刘鹗及老残游记资料》，《天津日日新闻》重刊时间为1904年。但据日本学者樽本照雄《〈老残游记〉写作刊行的两个问题》(见《清末小说研究集稿》，齐鲁书社2006年8月版，陈薇蓝译)之考证，1904年《天津日日新闻》根本没有可能刊载《老残游记》，属于阿英的误记。

(作者系宁波大红鹰学院教授)

本誌次号の公開は4月1日を予定

晚清小说作者扫描(贰拾壹)

武 禧

(一零四)

三爱

小说创作：《黑天国》

陈独秀(1879-1942)：安徽怀宁(今属安庆市)人。谱名庆同，原名乾生，字仲甫，号实安。署名甚多，有陈仲、由己、CC、三爱、只眼等。1896年考中秀才。1897年入杭州中西求是书院学习，开始接受近代西方思想文化。1899年因有反清言论被书院开除。1901年因进行反清宣传活动，受清政府通缉，从安庆逃亡日本，入东京高等师范学校速成科学习。1903年7月在上海协助章士钊主编《国民日报》。1904年初在芜湖创办《安徽俗话报》，宣传革命思想。1905年组织反清秘密革命组织岳王会，任总会长。1907年入东京正则英语学校，后转入早稻田大学。1909年冬去浙江陆军学堂任教。1911年辛亥革命后不久，任安徽省都督府秘书长。1913年参加讨伐袁世凯的“二次革命”，失败后被捕入狱，出狱后于1914年到日本，帮助章士钊创办《甲寅》杂志。1915年9月，在上海创办并主编《青年》杂志(一年后改名

《新青年》)。1917年初受聘为北京大学文科学长。1918年12月与李达等创办《每周评论》。积极提倡民主与科学，提倡文学革命，反对封建的旧思想、旧文化、旧礼教，成为新文化运动的倡导者和主要领导人之一。1919年五四运动后期，开始接受和宣传马克思主义。1920年在共产国际的帮助下，发起成立中国共产党，成为主要创始人之一。1921年7月在上海举行的中共第一次全国代表大会上，被选为中央局书记。从一大到五大，均被选为中央委员，先后任中央局书记、中央局执行委员会委员长、中央总书记等职务，是中国共产党早期的主要领导人。在大革命后期，对国民党右派的进攻采取妥协投降的政策。1927年中国大革命遭到失败，除了来自共产国际指导上的原因，他的右倾错误也是重要的原因。1927年7月中旬，中央政治局改组，他离开中央领导岗位。1929年11月，因为他在中东路线问题上发表对中共中央的公开信，而被开除党籍。同年12月发表《我们的政治意见书》，出版刊物《无产者》。1932年10月，在上海被国民党政府逮捕，判刑后囚禁于南京。抗战爆发后，他于1937年8月出狱，先后住在武汉、重庆，最后长期居住于四川江津。1942年5月在贫病交加中逝世。著作甚多，创作小说有《黑天国》，与苏曼殊合译《悲惨世界》（《惨世界》）。

(一零五)

寰镜庐主人

小说创作：《新水浒》

孙寰镜（1876-1943）：江苏无锡人。字静安、静庵。别号民史氏、寰镜庐主人。

室名栖霞阁。收藏家。1904年曾任《警钟日报》主笔，又与陈去病等人编辑出版《二十世纪大舞台》。曾帮助藏书家周叔弢购买到元树台岳氏本《左传》。著作有《明遗民录》《栖霞阁野乘》，小说《新水浒》，传奇《鬼怜寒》《安乐窝》《桃花扇演义》，翻译有《一线天》《血泪花》。

吉林文史出版社徐潜编辑出版“绣像禁毁小说”一套，其中有《金屋梦·风流和尚》一册，《金屋梦》一书作者署名为“近代·孙静庵”（此孙静安是否孙寰镜待考）。

(一零六)

卓呆

小说创作：《分割后之吾人》

徐卓呆（1880-1958）：江苏吴县人。名傅霖，字卓呆，号筑岩，别署阿呆、李阿毛、徐半梅、徐梦岩等。七岁丧父，由祖母及母亲抚养成人。二十岁左右赴日留学，专攻体育。回国后在上海创办中国体操学校及体操游戏传习所，开中国体操专门学校之先河，培养体育人材千余名，并撰体育专书多种。1910致力于戏剧改良，曾在《时报》独辟一栏，鼓吹新剧。撰写剧本多种并与汪优游在新舞台搭档演戏，艺名徐半梅。曾经执教于龙门师范、三江师范、南通伶工学校等。1912年后主编《时事新报》《笑画》和《新上海》等报刊。诙谐幽默作品多为滑稽小说，有“小说界的卓别麟”之称。1956年被聘为上海文史馆馆员。所著短篇小说百余篇，大多辑入《徐卓呆小说集》、《卓呆小说集》和《创痕》中。长篇小说二十余种《笑话

三千篇》、《非嫁同盟会》、《李阿毛外传》、《人肉市场》、《何必当初》、《馒头镇》、《情博士》、《软监牢》、《第三手》、《秘密锦囊》，翻译小说《大除夕》等。另有话剧《遗嘱》、《故乡》、《牺牲》、《怨》以及《话剧创始期回忆录》等。

(一零七)

宗敬

小说创作：福求人（《求福人》）

宗敬：待考。

根据陈玉堂《中国近现代人物名号大辞典》。中国近代人物中名“宗敬”者仅有荣宗敬。然《福求人》的作者“宗敬”是否就是荣宗敬，待考。

荣宗敬（1873年～1938年）：江苏无锡人。名宗锦，字宗敬。中国近代著名的民族资本家。早年经营过钱庄业。从1901年起先后在无锡、上海、汉口、济南等地创办面粉公司、纺织厂等被誉为中国的“面粉大王”、“棉纱大王”。1931年九一八事变后，日本的面粉和棉纱开始大量涌入中国市场，荣氏企业陷入困境。1937年抗日战争爆发，荣宗敬自上海避居香港，1938年2月病逝。

(一零八)

侠民

小说创作：《菲猎滨外史》

侠民：真实姓名不详。创作有小说《菲猎滨外史》《登狼山记》《中国兴亡梦》。

(一零九)

嗟予

小说创作：《新党现形记》

嗟予：未见著录。

(一一零)

梁溪司香旧慰

小说创作：《海上尘天影》（《断肠碑》）

邹弢（1850-1931）：生于无锡鸿山镇。字翰飞，号潇湘馆侍者。又名瘦鹤词人，味雪主人、醉月山人、花下解人、梁溪司香旧慰。晚年自号酒丐，又号守死楼主。世代务农。1868年从师读于姑苏。1875年考中金匱县秀才。1880年到上海，进入报界。三年后任《益闻录》报馆编辑。后往陕西、湖南、山东和北京等地，任幕府记室。与康有为、江建霞等有交往，1898年戊戌变法中几被株连，避居教堂得免。此后致力教育，任教于上海启明女校，至启明女校停办遂离职。1912与高太痴等人组织诗文团社“希社”，社员曾达到四百余人。每年印有《希社丛编》一期。1919年任“希社”社长。1921年冬，在苏州因祝好友舒问梅70寿辰，跌伤右足，治之不愈，行走艰难。1923年夏归无锡故里后宅，出任泰伯市图书馆馆长并创办《泰伯市报》，任总编辑。1925年刊出《希社中兴续编》（即希社丛编第八册）。同时又创办函授学校一所，专攻骈文诗词，培育文才。在报社时著《浇愁集》、《申江花史》、《珠隐琐言》等连续刊载二十多年。著有小说《断肠碑》（《海上尘天影》）、《智女》、《真真岂有此理》等。为俞达《青楼梦》作评。另有《三借庐剩稿》、《笔谭》、《万国近政考》、《速成文诀》、《诂词骈文捷径》、《五朝诗学津梁》及教科书《尺

牍课选》、《国文课本菁华》等出版。尚有
《散文》、《洋务管见》等书散失。 罇

清末小説から

野間信幸氏より資料の提供を受けました。感謝します。

成實朋子 近代中国における「童話」 「童話」叢書と『無猫国』をめぐって『学
大國文』第51号 2008.3.31

蔣 林 『梁啓超“豪傑記”研究』上海世紀
出版股份有限公司、訳文出版社 2009.1

柳 和城 商務印書館“橡皮股票”風波豈容否
認！ 与汪家熔先生商榷 『中華読
書報』1990.8.15 電字版

諸 家瑜 《雁来紅》雜考 兼談《雁来紅》
与黄人(摩西)之間的关系 ウェブサ
イト「蘇州地方志」2009.9.11 電字版

蘇 建新 林紵文化概論 『黑龍江史志』2009
年第18期電字版

2008年中外林紵研究綜述 『近代文
学琴声』第3期 2009.9.24 ウェブサ
イト「林紵文化研究所 Blog 福建工程学
院」

宋 声泉 重估《新青年》同人对“鴛鴦蝴蝶
派”的批判 『中国現代文学研究叢刊』
2009年第4期(総第129期)2009.7.15

王 木青 鴛鴦蝴蝶派小説の唯情主義 『中国
現代文学研究叢刊』2009年第4期(総
第129期) 2009.7.15

范伯群 『多元共生的中国文学の現代化歷程』
上海・復旦大学出版社 2009.8

序：范伯群教授の新追求和新貢獻……陳思和
我心目中的中国現代文学史框架
開拓啓蒙・改良生存・中興融會 中国現代通

俗文学歴史發展三段論

《海上花列伝》：中国現代通俗小説の開山之作
論中国現代文学史起点的“向前位移”問題

在“建構中国現代文学史多元共生新体系暨《中
国現代通俗文学史(挿図本)》學術研討
会”上的主題發言

分論易 整合難 探求多元共生文学叙事王国
之建構

19世紀末 20世紀初中国小説期刊現代化之歷程
中国現代文学史研究的“現在進行時”

論新文学与通俗文学的互補關係

中国大陆通俗文学的復蘇与重建

1921-1923：中国雅俗文壇的分道揚鑣与各得其
所

超越雅俗 融會中西 論 20世紀 40年代新市
民小説代表作家的創作經驗

通俗文学の現代化与現代文化市場の創建

論“都市郷土小説” 中国現代通俗小説対
“文学大家庭”的重大貢獻

黑幕征答・黑幕小説・掲黒運動

《催醒術》：1909年發表的“狂人日記” 兼
談“名報人”陳景韓在早期啓蒙時段的文
学成就(附《催醒術》原文)

從魯迅的“棄医從文”談到惲鉄樵的“棄文從
医” 惲鉄樵論

特縁時勢要求 以合時人嗜好 以評議魯迅、
胡適的有關“譴責小説”論点為中心

移民大都市与移民題材小説 論清末民初上海
小説中的移民題材中長篇

“兩個翅膀論”不過是重提文学史上的一個常識
答袁良駿先生的公開信

還原一場面對面的學術論争 致汕頭大學學報
編輯部的一封信

為轉型期的中国文学史破解疑案 推介樽本照
雄的《清末小説研究集稿》

“過客”：夕陽余暉下的彷徨(學術自述)